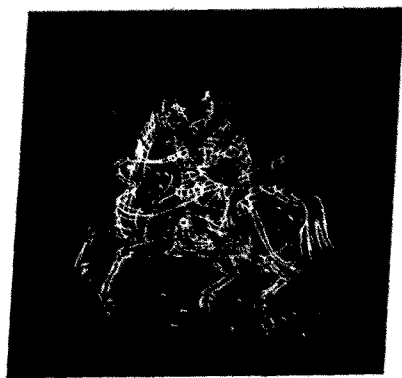


湖
笛

水
上
勉

湖 笛



毎日新聞社

湖
笛

価 七五〇円

昭和四十一年三月五日 印刷
昭和四十一年三月十五日 発行

著 者 水上 勉

発行者 赤木益一郎
印刷所 中央精版

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区有楽町
大阪市北区堂島
北九州市小倉区紺屋町
名古屋市中村区堀内町

©水上勉
検印省略

笛 ■ 目 次

湖北悲愁

失意の人

北の庄

海と湖の岸

湖賊の島

琵琶の河骨

あねいもうと

堅田水軍

セ

六

五

四

三

二

一

六

比良嵐

二二

宿望

二四

華燭

二四

清滝寺

二〇

大津城

三六

炎上

三〇

葦の笛

三九

あとがき

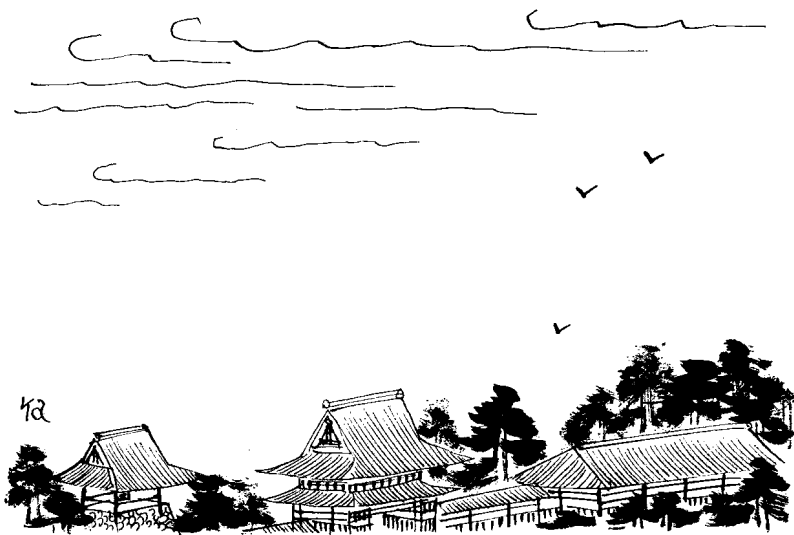
四三

裝本・挿絵
風間
完

湖

笛

昭和元・二・五〇元・三・三
毎日新聞夕刊連載



湖北悲愁

近江の若狭境から、今津の浜へ、山峡を南へいそぐ、二人の供侍をつれた騎馬の武士がいる。天正十年旧七月十七日の真昼である。山道はうだるように暑かった。

「佐兵衛、湖がみえるの」

馬上の武士が首すじの汗をふきながら供侍の一人をふりかえった。

「早や、今津へ着くぞ」

杉山を越えて、水坂峠へ出れば今津まで四里半。遠路をはるばるやってきたとみえて、主従の顔にはつかれがみえていた。馬上の武士は、鼻梁の高い、凛々しい顔だだった。一見してただの武士ではなさそうである。佐兵衛とよばれた供侍は、爪先だって会釈してから前方をみた。今しも、杉木立が割れて、扇子を半すぼめにしたような視界がひらけている。前方に白い空がみえる。いや、空ではなかった。空の色と見まがうばかりの湖の水面がのぞいているのだった。

「いつ見ても、琵琶の水は美しいの」

と馬上の武士はいった。佐兵衛とよばれた供侍は、このとき、もう一人の、屈強な髭面の相棒の顔をみた。髭面はだまっ

て見かえただけで黙々と歩いてくる。佐兵衛はその男の思い

屈した表情に氣押されたのか、やがて眼を伏せて歩きだした。

供侍たちが返事しないので、馬上の武士は、心もち不氣嫌そうに眉をくもらせていたが、

「水坂へきたらひと休み致そうか」

と、いった。よくみると、この馬上の武士は、生気のない顔をしていて、病身でもあるのか。汗のにじみ出た額にあおい静脈が浮き出ている。やせ細った頬には艶がさしていない。若い年齢に似あわず、どことなく用心ぶかい表情なのがいつそうこの武士を弱々しくみせているのだった。すると、

「殿」

佐兵衛とよばれた供侍が重い口をひらいた。

「羽柴殿には何故あってのお呼び出しにござりましょう。殿は病臥中だとおつたえ申しましたが、是が非でも出向せよとのこと……おそらくは重要な用事にござりましょうが」

武士はだまって空をみた。柔和な眼をやがて伏せた。そうして、瞑目したまま、蹄の音をかぞえるように上、下に首をうなずかせた。

「海津は丹羽殿の御領地、あるいは、われらに、また、高嶋郡内の一部なりとも領分に下さるやも知れぬ」

そういうと、自嘲するかのようには口角をゆがめて笑った。

この馬上の武士は元若狭国の領主、武田孫八郎元明といった。孫八郎が、羽柴秀吉から、近江の国海津へ出向せよとの呼び出しをうけたのは一昨日、七月十五日の早朝のことである。

羽柴秀吉からの書状には用件は何も書かれていなかった。

若狭神宮寺の元明の幽居へ使いにきたのは、丹羽長秀の家来で山田と名の男だった。秀吉がわざわざ書信で、よび出すにしては、用向きがはっきりしていなかったのは無気味にも思えたが——。しかし、使者は礼儀をつくしていたので、元明には樂觀しておれるものがあつた。元明は幽居の身ではあつたけれど、秀吉とは、二三ど会っていた。まだ、秀吉が長浜で木下藤吉郎と名のついていたころ、信長に従って、越前の朝倉を攻めた。その時、若狭にきて、元明の妻の竜子にもあい、元明が用意した西津の海のみえる城に泊つた。天正五年に、江州佐和山にいた丹羽長秀が、若狭を領するようになって、朝倉に身をよせていた元明は帰国を許され、幽居の身となつたが、その身を按じてくれてか、九年に高浜の逸見駿河守が病死すると、嗣子がなかつた逸見から高浜八千石を取りあげ、そのうち、三千石を元明に呉れている。ましてや、元明には、詮議のきびしかつた明智謀叛への荷担の罪は少しもなかつた。もっとも、光秀がこの六月二日に山崎で討死してから、明智方に通じた者の取調べはやかましくなり、若狭は、光秀と懇親であつた藤原冬広という鍛冶の出たところでもあるので、秀吉の詮議は殊のほか厳しかった。そのため石山の武藤上野も、高浜の内藤筑前も、白井民部も、嚴重な取調べをうけて、すぐ領地を没収されたが、元明だけはまぬがれていた。五月末に光秀から使者がきて、旧領再建を謀りたいなれば、明智方に参画しろと秘かなすすめはうけた。だが元明は、はっきり返事はあてていなかった。信長が殺されたということには心の底で嬉しさはかくせなかつたが、郷士をあげて、光秀に従おうとする野心はなかつた

のである。正直のところ、うつぼつとしたものをおぼえてはいたが、元明は時機を待とうと思つていた。

その矢先に、光秀は破れたのであった。

もし、秀吉が、持ち前の猜疑心から、元明も光秀に通じたとして、海津へ呼び出すのだつたら、わずか三千石の領主にすぎない元明よりも、五千石を領する松宮玄蕃や、武藤や白井をいち早く呼び出さなくてはなるまい。

元明は樂觀していた。

だからこそ、神宮寺の幽居に、竜子と、三人の子らを置いて出てくれたのである。

「佐兵衛、何を考えておる」

元明は馬上から、また首すじの汗をふきながらいった。

「按じぬがよいぞ。羽柴殿は、高次さえ許しておられるのだ……」

高次というのは、元明の妻の兄にあたる京極高次のことだったが、この男は明智に荷担して長浜を攻め、敗走したまま行方を絶つていた。

今津の町が見えはじめている。道は、水坂峠を越えるころから、ゆるやかとなり、白い一本道が桑畑の中をぬけてゆく。しかし、里へ出ると暑さはひどかった。

山も野も、さわがしい蟬しぐれであった。

今津から、五里の道を、武田元明が、ふたりの家臣をつれて、海津に着いたのは夕刻近かった。

湖北も、海津へくると、山が峻しくなり、石田川をすぎるころから、切りたつた崖が湖面に落ちこんでいる。その山裾を何

ども迂回しながら通らねばならない。暮色の落ちかかる湖の色は、若狭の海のように暗かった。

元明に尾いてきているふたりの家臣は、熊谷佐兵衛、熊谷平右衛門という兄弟である。元明が、朝倉義景に敗れて、若狭を取られ、越前一条谷につれてゆかれた日を転機として、武田元明の人生は、その日から暗転していたといえる。けれども、元明から離反してゆく郷土の中であつて、最後まで、尾いてきているのは、このふたりであつた。もつとも、佐兵衛も平右衛門も、元明がまだ全盛を誇つた頃に、家老をつとめた熊谷大膳の血筋にあたつた。

この年、佐兵衛は二十三歳、平右衛門は二十歳であつた。

海津にさしかかる途中の知内川をわたると、やがて暗くなりはじめた。北の方に、若狭境の赤坂山、三国山、乗鞍山の三つの峰が波状をえがいてなすび色に暮れなずんでいる。それを眺めていると、主従は、遠い道を歩いてきたという感慨に打たれた。

供侍の二人には、妻子はなかつたけれども、元明には、いま、神宮寺に残した竜子と、三人の子の顔があつた。

元明は、竜子とのあいだに十四歳になる武若と十歳になる俊丸と、三歳のかつという娘がいたのだ。

橋をわたつた。切りたつた大崎の岩礁がみえはじめた。そこは険しい半島の突端になっている。岬の落ちこんだ湖面のたたずまいが三人の主従の眼には、岬の多い若狭の海と変りない姿にうつるのであつた。

「あれは、何じゃ」

村口へきた時、今までひと言も口をきかなかった平右衛門が、髭面をひきしめて指さした。

山の手に灯が見えたからである。

いや、灯ではなかった。あきらかに篝火であつた。

篝火は、元明たちが村口へ到いたのを合図するかのよう、白煙をふきあげて燃えあがっていた。

煙が、暗くなった山に吸いこまれるように流れてゆくが、火は、二つ、三つ、大きな寺の門か何かのわきに生えた松の枝をふるわせて、空を焦がしはじめた。馬のいななきがきこえた。

「羽柴殿でしょうか」

佐兵衛が不安げに眼ばたきして問うと、

「さあ」

と元明は何もこたえない。しかし、顔の筋肉がびくびくと緊張のあまり小さきさみにうごいた。

近づいてくる蹄の音は、一騎ではなかった。二騎であつた。知内川の橋を渡り終えたばかりの主従の前へ、にゅっと馬の鼻面をつきつけるようにして止まると、夕闇の中に腹巻姿の三十年配の肥った武士がまたがっていた。そのうしろに同じ年ごろの髭むじやらの眼つきのわるいやせた男が控えていた。

「若狭から来られた武田殿か」

と馬上の武士は問うた。

「そうだ」

と佐兵衛が元明の馬の手綱をす早く摺んで前へすすみ出た。

「武田殿か」

と、もう一ど肥った武士が問うた。

「そうだ」

と佐兵衛は警戒の眼になった。一どいえばわかるはずではないのか。羽柴殿から、急いで出向するようにといわれてきたのだ。たずねるまでもあるまい。

肥った武士はいきりたつ馬の手綱を強くしめあげた。

「宝幢院の本坊で殿がお待ちだ」

といった。いい終ると、うしろの男に眼くばせして、そのま、橋の方へ馬を走らせるのであつた。どこへゆくのか。せわしなく鞭をくれるので、二頭の馬は、たてがみを逆立てて、齒をむきだし、まっしぐらに夕闇に消えた。

元明が到着したということを、海津の本坊へ報告する任務をおびてきたのではなかったらしい。ほかの用事があるとみえて、元明たちのきた道を今津の方へ消えるのであつた。

まず、それが、佐兵衛にも平右衛門にもかすかな不審を抱かせた。

「羽柴殿は宝幢院で待つておられるらしい」

と、元明は馬上でつぶやくようにいった。そうして、意を決したように手綱をひいて、馬の足を早めた。

「羽柴殿には出陣でございましょうか」

佐兵衛が燃えさかる篝火をみて問うた。篝火のある方角が山門らしいのだった。そこが宝幢院らしかった。大きなそり棟の門の影がみえる。炎は大きくゆれてゐる。そのたびに、棟瓦が橙色に光った。

やがて、元明は高い山門の前についた。

宝幢院――。

御影石の塔石に、うつすらと字がよめる。ここであったか。……真言宗の大本寺である。京都の智積院の中本山として江北に名をとどろかせた名刹だった。

山門の下に、腹巻姿の徒兵が十人ばかり屯ろしていたが、元明の姿に気づくと走りよってきた。

「馬を降りられい」

と、そのひとりがすすみ出て横柄にいった。

待っていたといわぬげであった。元明は、す早く鞍に手をおいてとび降りた。

「武田孫八郎元明が来たと告げられい」

従卒に向って、元明は威丈高に呼ばわった。

従卒たちの顔は、いずれも、赭く汚れていた。ぎらぎらとひかっている。暑い最中に火を焚くのは、出陣の際の合図になっている。また、敵を威嚇するための火が焚かれる場合もある。

大汗をかきながら、腹巻をまとった装束で火を焚いている兵士どもはいま、滑稽にみえた。

従卒の中の一人が、奥の方へ知らせに走った模様だったが、間なしにもどってきて大声でいった。

「武田殿、ひとりで、寺内に入られい」

佐兵衛と平右衛門は顔を見あわせた。意外な思いがした。殿ひとりをひきわたすためわざわざここへきたのではなかった。怒りがこみあげた。しかし、従卒たちの顔を見ると、なにか殺気だつてみえる。

「佐兵衛」

と、元明がふりかえった。

「よい。わしがひとりでゆこう。羽柴殿に会ってこよう」

というと、元明は、つかつかと山門の段を上った。太い巨木の横物がさしわたされた敷居を、元明はぼいと跨いだ。そうして、この時、何げなくふりかえってにっこりした。

「かまわぬ。お前たちはそこで待っておれ」

佐兵衛と平右衛門は息を呑んでその元明の顔をみつめていたが、炎のあかりでみたせいか、主人の顔は血をふきかけたように赤くみえた。

元明はあとをふりかえらなかつた。

こんもりとつつじの植わった道をゆくと中門があった。すぐ眼の先にみえていた本堂と庫裡の建物が、歩いてみるとずいぶん遠いことがわかった。

元明は、山門前に置いてきた二人の家臣の顔を思いだしながら、案内の武士のあとを尾いていった。

中門をくぐると、唐門があった。その扉はあいていた。白洲の前庭に、小さく火が燃えていて、木目の出た本堂へ上る階段がみえた。そこに、二人の武士が立っている。元明は太股で、ゆっくり歩いた。

「遠路のところを御苦労でござった」

と左側に立った武士が割れたような声でいった。

元明はだまって草履をぬいだ。ぬごうとしたはずみに、ぶつりと鼻緒が切れた。

「縁起でもない……」

ふと頭をかすめた不安なものを掻き消すようにつとめながら、足袋裸足のまま階段をあがった。

「お待ちかねです。殿様は書院におられます」

と一人がいい、やがて二人の武士は、両側から元明をはさむようにして、渡り廊下の方へみちびくのであった。

薄気味わるい気がしたのはすぐその後のことである。書院の奥の間には灯がなかった。暗い上座で、小さな丸い影が左右にうごいていただけである。その影は瞬間、くしゃみを一つした。

羽柴秀吉にちがいがなかった。

元明は、一だん高い下間の部屋に足を入れた。畳をふむと、古床とみえてギシッと鳴った。次の間にきて、元明は膝をついた。両手をついた。

「武田元明にござります」

「元明か」

と秀吉の声がした。いや、その声は、黒い小さな影から、弾丸がとんでくるように、不意に元明の耳を打った。

「待っておったぞ」

と小さな影はいった。

「その腹を切るのが見たいのじゃ。元明、わしの前で、いま、すぐに腹を切れ」

待ちあぐねていたようにして、秀吉の口から出たその言葉は、まだ馬の背中のぬくもりののこっている元明の全身を凍らせるに充分であった。

「……羽、羽柴殿」

と、うめくように元明はいったが、あとは声が出なかった。謀られたと知った口惜しさと、暢気にここまでやってきて、

つい、ふらふらと一人身でのりこんだ己れの手ぬかりに、歯ざしりしても、追いつかぬ。愚かさに身がふるえた。

「どうした。切れぬことはあるまい。そちは、信長殿の恩を忘れて、光秀めに走りおった……一条谷で首斬られるところを助けてもろうて、もとの若狭へ帰らせてもらったのを忘れての……、三千石の扶持ももらっておきながら、信長殿を裏切った……」

「そ、そのようなことは、ない。わしの知らぬことだ」

「シラを切る気か、元明……」

秀吉はせせらわらうように言葉をついだ。

「ならば、問おう。そちのいる神宮寺の桜の本坊の家に、なぜ、冬広がかくれておった。そのわけをいえいッ」

「冬広が……存ぜぬ」

「たわけたことを申せ。あの鉄砲鍛冶めが、光秀めに渡そうとして、五十挺もの火繩銃をかくしておったのを、よもや、隣りにおったそちが知らぬはずはあるまい……。なにか、そちが知らぬとすれば、冬広はなぜ、神宮寺にかくれておった。神宮寺から、龜山に逃げおったが、そちのさしがねが無うて、どうして、逃げられた」

「そ、そのような、言いがかりを」

「言いがかりではないぞ、元明。そちが言いがかりというなら、致し方はない……腹を切れ。そちも武田の武士じゃ。いさぎよく、腹を切って、証しをたてい」

元明の眼は血走っていた。暗い上段の間をにらみつけようとしたが、口惜しさに焦点がぼやけた。唇がふるえて、声も出な

い。閉じた瞼から、はらはらといくすじもの涙がこぼれた。それは頬をつたって、襟もとへ落ちた。

「武若、俊丸……かつ……」

元明は、瞼にうかんで消える三人の子の名をかわるがわるによんだ。

秀吉の冷たい声が、煤けた暗い天井に吸われて、無気味な静寂がつづいた。

武田元明は、空間を凝視したまま、かすかに息を吐いていたが、やがて正座した両膝を前方へずらせて、じっと身構えた。

と、秀吉の小さな影が、わずかに左右にうごいた。うしろの床の間で、灯明の明りがゆれている。そのために、秀吉の顔は、黒く浮いてみえるだけではつきりしない。だが、元明には、嘲笑をうかべて、自分を見すえている猿のような小皺のよった顔が、はつきりよみとれるようであった。

言いがかりも甚だしい、と元明は思った。

いま、秀吉の口からもれた藤原冬広なる刀鍛冶とは、つきおうたことは一どもなかった。冬広が佐々木家の家臣であり、藤原五郎衛門と名のつて、小浜に鍛冶師として入ってきたことは知っていた。しかし、この男が光秀の遠縁の者だとわかったのは、つい最近のことである。元明が、冬広の名をきいた時は、丹羽の家来が追求しはじめていた時で、その時はもう、冬広は、光秀の待つ亀山へ逃げていったあとである。会ってもないし、神宮寺の幽居は丹羽の探索もうけていない。

だいいち、神宮寺の仮住居は、丹羽長秀が秀吉と語らい、小浜城から元明を放逐した際、向うからしつらえてくれた住居で

あった。冬広がそのようなところへ火縄を五十挺もかくしたり、潜伏したりするはずはないではないか。

言いがかりも、こうなれば卑怯千万である。しかも、その言い方が、秀吉らしく、憎々しげであった。元明の腸は千切れるようにうごいた。

光秀の誘いを一蹴し、孤身を守っていた努力も、秀吉の奸智の前では何の役にもたたない。水泡であったと元明は思った。

「羽柴殿」

元明はうめくようにいった。

「じっと見ておられい。武田の武士は卑怯者ではござらぬ。逃げはせぬ。腹を切ることもいとはいはせぬ。じっとみて、おられい」

蒼白な顔に脂汗がしたり落ちた。病身なので息がせわしい。元明が鉄面をつくって歪める口もとを、秀吉はじっと見つめていた。この男に腹を切る勇氣の出たことを見てとった。

「そうか。切ればよい。早く切れ。わしが見届けよう」

と秀吉はいった。そういうと、小柄な軀を、皮腰掛からひょいと立ち上らせて、鼻のつまったようなしわぶきを一つして、秀吉はくると元明に背を向けた。

控えていた侍どもがさっと立った。

山門の前に待っていた佐兵衛と平右衛門へ、寺内の方から急に人騒ぎがきこえたのは、それから間もない時刻であった。

火を焚いていた従卒どもが、にわかに、門内に入った。と思うまに、今まで大きく開いていた山門の扉がギイギイと音をた

てて閉まった。

「兄者」

平右衛門が髭面をふるわせて佐兵衛をふりかえった。

「殿が危い」

言ったのと、平右衛門の軀が、しまりかけようとする扉に向
って、ぶつかつたのが同時である。横木のカンヌキをさしこ
もうとしていた腹巻姿の一人が、猿のようにつき進んできた平
右衛門の軀の重みで、ギイギイと逆戻りした扉に押されて、一
間ばかり吹っ飛んだ。

「道をあけいッ」

平右衛門は、石畳の上に両足を踏んばって従卒どもをにらみ
つけた。

石畳の両側につつじが植えてある。ガサツと丈高い枝がゆれ
た。瞬間、ひゅっと風を切つて刃が平右衛門の横腹めがけてつ
いてきた。

「卑怯なッ」

平右衛門は立ち退りざま、

「兄者」

とよんだ。

「ここじゃ、平右衛門」

佐兵衛の声は唐門の方できこえた。篝火が消えかけている。
暗いからわからないのであった。一足とびに方丈にむけて走っ
た佐兵衛の軀は、五線を白くうきあがせた土塀に、びったり
吸いつくようによりそっている。腹巻姿の男がつん裂くような
悲鳴をあげてのけぞった。血をふいて地べたにつつ伏した。佐

兵衛はその上をす早く飛び越えていた。

玄関を入ろうとしたが、すぐ、ひっかえしてきた。戸口に槍
ぶすまがあつた。入りこめもしない。佐兵衛は齒ざしりした。

「無礼者ッ」

とこの時、玄関からどなりつける声がした。

「武田殿は、自害なされたぞ……刀を捨ていッ」

「自害……?」

佐兵衛の口からと、そのうしろにつつたっていた平右衛門の
口から同時にうめき声がもれた。

「刀を捨ていッ」

声は従卒の上役らしく威丈高であつた。

「武田殿は武士であつた。腹切つて身の潔白を証されたぞ……
静まられいッ」

「何をいうッ」

平右衛門は、叫びざま、一段高くなつた玄関の床ばりに向つ
て躍りこんだ。

「何故、殿が自害なされたかッ。理由をいわれいッ」

平右衛門は血刀をかまえた。

仁王立ちに、足をふんまえて立ちふさがつた男は、髭むじゃ
らの顎をひいて兄弟をにらみつけていった。

「明智の残党をかたらい、謀反をたくらんだ罪じゃ。羽柴殿の
御前で、今しがた……武士らしく、腹かき切つて立派な最期を
とげられた……そちたちも刀を捨ていッ」

平右衛門は入りこもうとした足をたじろがせて二三歩退い
た。佐兵衛を見た。